第七回 造り酒屋で愉しむ吉田文雀の会 酒屋万来文楽 「摂州合邦辻 合邦庵室の段」

平成26年11月29日(土) 15:00開演
白鷹禄水苑 宮水ホール

「酒」と「芸能」という西宮の持つ二つのアイデンティティーを結び付けて内外に発信する催事として、回を重ねてきた「酒屋万来文楽」。第7回目となる今回は、「摂州合邦辻 合邦庵室の段」を取り上げました。

「摂州合邦辻」は、これに先行する俊徳丸を主人公とした、能「弱法師」や説経節の「しんとく丸」をふまえたもので、さらにもとを辿れば、大阪の四天王寺ゆかりの「俊徳丸伝説」に由来しています。本日の文楽公演に先立ち、10月3日には『俊徳丸をめぐる』というテーマで能「弱法師」や説経節の「しんとく丸」をもとにした講談を上演しました。説経節がおそらく本節となったもとの伝説により忠実に、人間の業や情念など、ドロドロした部分を克明に描き出しているのに対し、能「弱法師」は、説経節にみられるような絶望から救済へのストーリー展開は一切排除し、親子再会の物狂能という枠の中で、俊徳丸が四天王寺の西門の鳥居越しに西に沈む太陽を拝みながら西方極楽浄土を観想していると、かつて見馴れた難波の浦の美しい景色が心によみがえるという、心の内なるドラマを描く展開となっています。さらに時代が下るとこれらを骨子とした浄瑠璃が書かれ、安永2年(1773)大坂で、「摂州合邦辻」として初演されました。先行芸能には登場しない人物を配し、継母の義理の息子への恋を、大名高安家のお家騒動を背景に描くという、浄瑠璃ならではのドラマチックな展開となっています。中でも最も多く上演されているのが、物語の大詰めとなる「合邦庵室の段」です。
舞台には、合邦庵室のセットが組まれています。玉手御前が庵室を訪れる際の木戸と、俊徳丸と浅香姫が控える奥の間、そして登場人物の出入りの都合上必要なものだったのですが、わずか奥行き2メートル余りの空間にこのセットを組むのには、かなりの工夫を要しました。

まず下手から俊徳丸を探して実家までやってきた玉手御前が登場します。ここで玉手は俊徳丸への恋心を赤裸々に吐露します。「母様のお言葉なれど、いかなる過去の因縁やら、俊徳様の御事は寝た間も忘れず恋い焦がれ・・・」有名なクドキの場面です。哀切を帯びた浄瑠璃、三味線に合わせた玉手の所作からは、そこはかとなく漂う色気や、下を向いた時の愁いの様子など、生身の人間以上にやるせない女心が伝わってくるようでした。その後玉手は自分の思いを遂げるために俊徳丸に毒を盛ったと打ち明けます。義理の息子への恋慕のあまり、嫉妬に狂う玉手の乱行(らんぎょう)。和生さんの遣う玉手が恋敵の浅香姫と組み合う場面の激しさには息を呑むような思いがしました。あまりに非道な娘に、ついに怒りの刃をつきたてる合邦。その後、手負いとなった玉手が真実を語る場面は、物語の最大の山場となっています。娘の意外な忠義を聞かされ、オイオイと慟哭する合邦。それぞれの心の激流が、津駒大夫さんの全身からほとばしり出るような浄瑠璃と藤蔵さんの強烈なバチさばきで表現されます。思わず涙ぐむ観客の姿も見受けられました。それほど心が揺さぶられるような感動的なシーンでした。

休憩をはさみ、造り酒屋ならではの蔵出し限定酒のきき酒をしていただいた後、第二部は「文楽の手ほどき」です。吉田和生さんにご登場いただき、演者自ら、演じる上での苦労や、演目にまつわる興味深いエピソードを語っていただきました。後半は会場からの質問に答えるかたちで、熱気を帯びた舞台の様子とは打って変わり、終始和やかな雰囲気の中進められました。立役と女形のいずれも使われる和生さんに、どのように遣いわけるのかという質問があり、これに対して立役と女形を区別するのではなく、その役の性格や心情を遣い分けるのであって、そのための役の解釈がとても重要だと答えられたのが印象的でした。

【 出演者 】

浄瑠璃		竹本津駒大夫
三味線		鶴澤藤蔵
人形	俊徳丸	吉田文雀
	玉手御前	吉田和生
	親合邦	吉田玉志
	合邦女房	吉田勘市
	浅香姫	吉田一輔
		吉田玉佳・吉田文哉・吉田玉勢・吉田玉翔・吉田玉誉・吉田勘次郎 吉田勘介・吉田玉路・吉田和馬・吉田玉延・吉田玉峻・吉田簑悠